

防災士養成講座（講義・演習）

事前研修では、講義・演習形式で5講座を実施しました。自然災害や防災に関して学び、宿泊研修で訪問する岩手県における東日本大震災の被災状況等を事前に学習しました。

[1] 「近年の自然災害に学ぶ」

講師／特定非営利活動法人日本防災士機構 理事
甘中 繁雄氏

防災士の育成機関で指導にあたる甘中氏の講義は、西日本で発生したばかりの平成30年7月豪雨の被害報告から始まりました。被災地入りした防災士の活動が次々にスライドで紹介され、研修冒頭からタイムリーかつ臨場感に富む内容に、参加者の表情も一気に引き締まり、真剣に聞き入っていました。

様々な災害が、時間的にも地理的にも繰り返されてきた日本。世界のわずか0.25%に過ぎない国土に、火山



の7%、マグニチュード6以上の地震の18%が集中し、52万超の土砂災害危険箇所、年間2~3回上陸する台風、111の活火山……といった具体的な数字でイメージを膨らませつつ、広島土砂災害、熊本地震、岩手・小本川の氾濫、糸魚川の



大火などの実例を挙げ、それぞれの災害が起こる仕組みや被害の特徴を、質問を交えながらひも解いていきます。

どの災害にも共通する教訓は、「自分の住む地域の災害特性を知る。」「過去の災害を伝承する。」「自分だけは大丈夫と思う正常性バイアスを排し、当事者意識をもって災害をイメージする。」に尽きる、と強調する甘中氏。実際の惨状とその背景を分析した上での説得力にあふれた言葉に、参加者も深くうなずいていました。

[2] 「津波のしくみと被害」

講師／東北大学災害科学国際研究所 学術研究員
安倍 祥氏

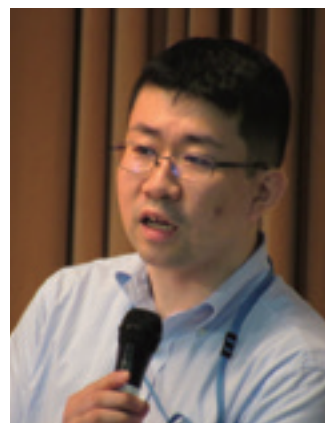
気鋭の研究者である安倍先生からは、御自身の研究テーマである津波避難対策について、様々な側面からのお話がありました。

まず、津波の発生原因やメカニズムについて、映像「自分の命は自分で守る 津波災害への備え：東日本大震災を教訓とした防災教育用教材」（内閣府）も用いて分かりやすく解説していただきました。巨大な水の塊が、予想以上の高さまで猛スピードで駆け上がってくるのが



実感され、参加者も熱心に聞いていました。

記録に残るだけでも、平安の昔から津波災害が繰り返されてきた三陸・東北地方。津波は、街や建物の流出のみならず、火災、船舶の座礁、瓦れきや土砂の堆積など、多様な被害をもたら



らします。被害者の死因や年齢構成、避難開始のタイミングやきっかけなど、多角的な分析結果からも、避難が早ければ、助かった命が多くあったであろうことが浮かび上がります。

震災以来、人命を守るための対策があらゆる側面から進められ、以前の行政任せから、地域ごとに避難できる仕組みづくりへと、住民の意識がシフトしています。「防災士として、どう働き掛けるかが問われている」と、切々と訴え掛ける講師を前に、参加者は改めて、防災士を目指すことの意義、そして責任に目覚めた様子でした。

[3] 「これからの防災教育 ～人を育む・未来をつくる～」

[4] 「避難所運営シミュレーション 守られる人からアクターへ！」

講師／慶應義塾大学環境情報学部 准教授 大木 聖子氏

研修2日目は、高校生の時の阪神・淡路大震災を機に地震学を志したという大木先生の講義から始まりました。進行に協力してくれる研究室の学生6名の自己紹介では、世代の近い彼らから防災について学ぶきっかけを聞き、参加者は防災について身近に感じたようでした。

講義は、世界の地震の約10%が発生する地震大国・日本では、マグニチュード7程度の地震は、どこでも起こり得るという基礎知識から入りました。実際の動画を見ながら、こんな強い揺れでは身動きできないという、シンプルながら鋭い指摘に、はっとさせられます。まず揺れの大きさ・長さから、直下型か、津波が来るかを判断し、次の行動に移る。学校ではまずこれを教えてほしい。先生の指示を待つ、校庭の中央でしゃがむといった従来の形骸化した避難訓練では、現実の地震には対応できない、と強調されました。自分で判断し瞬時に行動することこそ、命を守る訓練なのです。

続いて、避難所で起こり得る多様な課題を、周囲と協力してどのように解決していくか、全員で考える機会を与えていただきました。避難所の運営は、行政でも学校でもなく、避難者自身が行うからです。

与えられた課題は、「防災ノート～災害と安全～」にも掲載している4コマ漫画です。震災の体験談などを基にした場面設定で、情報班・食料物資班など七つの役割に分かれ、問題発生・問い掛けを受けて、最終コマの説

明・説得のセリフを考えていきます。正解はなく、災害時の場面を、自分のこととしてリアルにイメージすることが目的です。様々な意見が飛び交いました。

衛生班編では「トイレ掃除の分担が、余震を恐れて夜だけ訪れる在宅避難者には適用されない。夜に掃除してもらうわけにもいかず、不公平である。」という課題に「8～9時は避難所で生活している方、18～19時は在宅避難者、力仕事は主に男性に。」という具体的な案も出ました。また、食料物資班には「不足している食料を、いかに配分するか。」という課題が与えられました。「子供、妊婦の方、お年寄り、大人という優先順位を設ける。」「食品アレルギーをもつ方に配慮する。」など、課題から発展した、忘れてはならない重要な点も示されたのが印象的でした。

発表後、大木先生からは「様々なシチュエーションを想定できていて、頼もしく思った。」とのコメントを頂きました。

そして最後に「そもそも地震や台風は、災害ではなく自然現象であり、防ぐことはできない。でも人間の知恵できちんとした社会を作れば、自然現象を災害に変えずに済む。災害で誰も死ぬことがなくなる未来は、必ずくる。この研修、さらに実際の被災地での学びで、皆さんが防災リーダーとなり、その目的に向かって進んでほしい。」と締めくくられました。



[5] 「被害想定とハザードマップ 震災を生き抜いた子どもたちに学ぶ」

講師／岩手大学大学院教育学研究科 准教授 森本 晋也氏

東日本大震災前に釜石東中学校で教べんを執られ、防災教育に携わっていた森本先生からは、津波から逃げ延びた子どもたちのケーススタディや聞き取りから見てきたものを、実際のインタビュー映像なども交えて伺いました。

地震の後、同校の生徒たちは、指定の避難場所ではまだ危ないと判断しました。更に高台を目指し、津波がすぐ背後に迫る中、一緒になった小学生や保育園児を手助けしながら、急な山道を必死に駆け上がりました。

このとき彼らを助けたのは、事前に学習していた様々な知識や経験でした。家族等を待たずに一人でもとにかく逃げることで結果的に皆が助かる「てんでんこ」の知識、そして何人もが連なって横たわり20mという津波の高さを実感したり、速度の近い自動車を津波に見立て、追われて逃げるといった疑似経験でした。



さらに、被害のあった現場で自分で見聞きするフィールドワークも重要です。これは、今回の宿泊研修でもぜひ体感してほしいと先生は語られました。

学校のある^{うのすまい}鵜住居は、釜石市内で最多の死者が出た地区で、人々が亡くなった地点は、ハザードマップの浸水域の外に目立ちます。大丈夫だという思い込みが、避難を妨げてしまったのです。当時高校生だった教え子たちが大勢亡くなったことに、防災学習が十分でなかったと悔やむ森本先生は、「防災士を目指す皆さんには、大きな災害時に少しでも被害を減らせるよう、頑張してほしい。」と、参加者へ強く訴えていました。

最後に、震災2年前に当時の中学生が自主制作した映画「てんでんこレンジャー」を鑑賞しました。津波への意識が薄れた人々に「てんでんこ」を教えるという内容です。今は大学生になった出演者も、宿泊研修では森本先生と一緒に現地を案内してくれます。参加者のモチベーションが高まる、熱い講義となりました。

グループ協議

防災士養成講座の後は、数人ごとのグループに分かれての話し合いがもたれました。

簡単な自己紹介に始まり、2日間の事前研修の振り返りや、翌月の宿泊研修に向けての抱負などが、会場のそこそこで、生き生きと語られていました。

